

自治体の取り組み事例

神奈川県横浜市

多様な園や学校が 共有・協働するしくみを整え 育ちと学びをつなぐ

取り組みの ポイント

- 汎用性の高いカリキュラムの方向性を示し、各園・学校が理念や実態に応じて活用できるようにする。
- 園や小学校が実際の子どもの姿を通して、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手がかりに、共通理解や協働を図るしくみをつくる。
- 顔の見える交流や研修の場を充実させて、相互理解や協働を促進する。

“ 理念や活動が異なる園や小学校が、「10の姿」をもとに協働する ”

30年以上前から 幼保小の交流事業を推進

政令指定都市として約378万の人口を擁する横浜市には、市内に338校の市立小学校、223園の幼稚園、64園の認定こども園、およそ1,500園の保育所が存在（2022年度）し、学区が広い小学校では40園以上から入学するケースもあります。各園の保育の方針は多様なため、それぞれの体験をしてきた新1年生に対して、小学校が指導やサポートに苦勞することもありました。そうした難しさを少しでも解消するため、30年以上前から、幼保小の先生方が集まり、情報を交換して相互理解を深める取り組みを続けてきました。そんな中、情報交換だけでなく、保育や教育そのものをつなごうという声が挙がり、2012年、同市は「横浜版接続期カリキュラム 育ちと学びをつなぐ」を策定しました。横浜版接続期カリキュラムでは、園向け



横浜市こども青少年局
保育・教育部 保育・教育支援課
幼保小連携担当
田村憲一 課長



横浜市こども青少年局
保育・教育部 保育・教育支援課
幼保小連携担当
鈴木暁範 係長

のアプローチカリキュラムと、小学校向けのスタートカリキュラムを導入していますが、いずれも各園・各小学校が自由に遊びや活動を組み立てられる汎用性があります。こども青少年局保育・教育支援課の田村憲一課長は次のように説明します。

「各園では、遊び中心の保育を展開したり、文字や数などの学びに注力したり、運動やスポーツを重視したりと、理念や活動が大きく異なります。また、小学校の実態もさまざまです。そのため、

共通のカリキュラムをあてはめるのではなく、横浜市がめざす考え方や枠組みを示し、その中で園や小学校が理念を大切にしながら、市全体として同じ方向に進めるようにしました」

アプローチカリキュラムの活動の柱は、「学びの芽生えを大切にした活動の充実」「協同的な遊びや体験の充実」「自立心を高め新しい生活をつくり、安心して就学を迎えられる活動の充実」です（図1）。これらの体験を通して「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（以下、「10の姿」）を育てていきます。

スタートカリキュラムは、園での育ちを学びにつなげるために、「なかよしタイム」「わくわくタイム」「ぐんぐんタイム」の3つの学びの時間帯を設けているのが特徴です（図2）。小学校でのスタートカリキュラムの実施率は100%であり、園での生活を意識したゆったりとした時間の中で、教科の学習へと入っていく取り組みも広がりつつあります。

園と小学校が連携・接続の具体的な活動を検討する際に、共通の手がかりとするのが「10の姿」だと、同課の鈴木暁範係長は話します。

「園や小学校が『10の姿』を意識してカリキュラムを作成し、支援や環境づくりを検討することが、子どもの連続した育ちを支えるために重要だと考えています。小学校での『10の姿』の浸透度には課題があるので、市として小学校に例示するカリキュラムの枠組みには『10の姿』を組み込み、できるだけ目に触れるように工夫しています」

横浜版接続期カリキュラムとともに、幼保小連携における共通の指針となっているのが、「よこはま☆保育・教育宣言」です。「安心できる環境をつ

図1 横浜版アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムのつながり

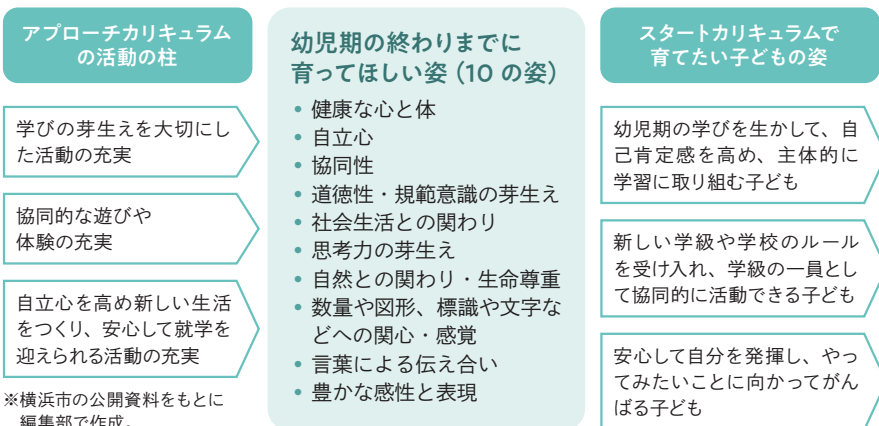


図2 スタートカリキュラム 3つの学びの時間帯

なかよしタイム	一人ひとりが安心感をもち、担任や友達に慣れ、新しい人間関係を築いていく時間です。自分の居場所を学級の中に見出し、徐々に集団の一員としての所属意識をもち、学校生活の基盤である学級で、安心して自己発揮できるように工夫していきます。
わくわくタイム	幼児期に身に付けた力を発揮し、主体的な学びをつくっていく時間です。生活科を中心として、様々な教科等と各科・関連を図り、教科学習に円滑に移行していくための時間として位置付けています。幼児期における遊びを通した総合的な学びを生かし、子どもの思いや願いに沿った学習や、具体的な活動や体験をきっかけにして各教科等につなげる学習を大切にすることで、主体的に学ぶ意欲を高めます。
ぐんぐんタイム	わくわくタイムやなかよしタイム、日常生活の中で子どもが示した興味や関心をきっかけに、教科等の学習へ徐々に移行し、教科等特有の学び方や見方・考え方を身に付けていく時間です。

※横浜市の公開資料をもとに編集部で作成。

くり、一人ひとりを大切に保育します」「子どもの育ちと学びを支える主体的な遊びを大切にします」という2つの宣言があり、市の保育・教育施設の関係者が、何を大切にして乳幼児期の子どもにかかわるかを考える基本となります。（P.8 図3）。

「宣言に描かれている『安心できる環境』や『主体的な遊び』といった内容は、小学校での育ちにも大きくかかわります。そのため、小学校に対しても、特にスタートカリキュラムの時期は、この宣言を意識することを伝えています」（鈴木係長）

接続期カリキュラムを通して探究心を育みたい

アプローチカリキュラムにもとづく具体的な実践は園によって異なりますが、ここでは鈴木係長が印象的だったと語る実践を紹介しましょう。

ある園で子どもたちが「ギネス記録に挑戦する」という目標を立て、紙飛行機の飛距離を伸ばす挑

戦を続けていました。子どもたちは保育者の助けを借りて大人向けの書籍なども参考に試行錯誤を重ね、10メートル以上の飛距離を記録しました。

「保育者が、『この本は難しいから読めないよ』などの制限を設けずに本気で子どもにつき合い、日に日に記録を伸ばしていく様子が印象的でした。大人の支援のあり方次第で、子どもはどこまでも探究していくことを改めて感じました」(鈴木係長)

そうした探究的な遊びは、非認知能力の育成にもつながると考えています。

「横浜版接続期カリキュラムの中では『非認知能力』という言葉は用いていませんが、探究心をサポートすることで、粘り強さや協調性などの非認知能力も育んでいけると思います」(鈴木係長)

そのような経緯もあり、2022年には「探究心を育む遊びプロジェクト」という研究会を立ち上げました。市内の幼・保・小・特別支援学校から希望者を募り、当初の定員を超える40人が参加。探究心を軸として、園や小学校における遊びや活動を高めていく指導やサポートのあり方を、合同で研究しています。年度末には、市庁舎のアトリウム*で総合発表会を実施し、保育・教育関係者のみならず、保護者などにも広く発信していく予定です。

連携というと大所帯になりがちだった横浜市では、探究心の育成のような特定のテーマを設けた、プロジェクト型の少人数での幼保小連携は初めて

図3 よこはま☆保育・教育宣言 ~乳幼児の心もちを大切に~

宣言1 安心できる環境をつくり、一人ひとりを大切に保育します

子どもたちの命を守るとともに、一人ひとりの個性や発達に合わせた環境の中で、自分を「かけがえない存在」だと感じて日々を過ごすことができるように関わります。

- 1 安心感・信頼感を大切に、子どもを守ります。
- 2 子ども一人ひとりを受け止めます。(子どもたちが自己肯定感をもって、様々なことに挑戦できるようにします。)
- 3 子どもが様々な人と関わることを大切にします。(色々な人と関わり、多様性に気付けるようにします。)

宣言2 子どもの育ちと学びを支える主体的な遊びを大切にします

乳幼児期の育ちと学びは、自分の遊び(体験)を通して「未知なことや分からないことを自分なりに考え、自分自身が納得するまで探究し続けること」です。このような乳幼児期の育ちと学びは、生涯にわたる子どもたちの生きる力を育みます。

- 1 乳幼児期の子どもが、豊かで多様な環境と関わりながら育つことを大切にします。
- 2 夢中になって遊びこむことによる育ちを大切にします。
- 3 保育者の重要な仕事は一人ひとりの子どものよさを発見し、育てることです。

※横浜市の公開資料をもとに編集部で作成。

の試みで、うまくいくか不安を抱きながら始めたといいます。しかし、心配をよそに参加者一人ひとりがテーマに強い関心をもっているために対話が深まりやすく、それぞれの園や小学校の中で取り組みを広げる様子が見られるなど、さまざまなよさがありました。そのため、今後もそうした幼保小連携を充実させていく考えです。

“ 互いの顔の見える交流を通して、ともに子どもを育てる関係を築く ”

互いの支援の工夫を伝え合い 子ども理解の幅を広げる

同市では幼保小の先生方が顔の見える関係を築けるように、研修にも力を入れ、年4回の幼保小合同の接続期研修会を行っています。さらに、グループに分かれて幼保小のそれぞれの代表者が実践を発表し、子どもの育ちや学びについて語り合い、相互理解を深める研修も開催しています。

『『どのような場面で子どものよさが発揮されたか』など、幼保小の先生方がそれぞれの観点から子どもの姿をもとに語り合うことを大切にしています。さらに、互いが実践の中で工夫しているポイントを伝え合うことで、子どもを見取る幅が広がっていきます』(鈴木係長)

1つの子どもの姿に対しても、それぞれの考える支援が異なることもあります。例えば、1人で過ごしている子どもに対して、ある小学校の先生

*ガラスなどの光を通す素材で屋根を覆った大規模な空間のこと。

は「友だちと遊んでおいで」と促したり、ほかの子どもに声をかけるようお願いしたりする支援をよく行っていたそうです。しかし、研修で語り合い、実践を見る中で、園の先生が子どもの様子を通して本当は友だちと遊びたいのか、それとも1人でいたいのかという思いをくみ取り、それに合わせた支援をしていることを知り、大きな気づきがあったといいます。

「園や小学校、先生同士などの違いを理解することで、どの発達段階においても一人ひとりに合わせた支援がしやすくなると思います」(田村課長)

また、研修を通して園とのつながりを意識するようになり、園で親しまれている色水などの素材を生活科に取り入れた小学校の先生もいました。

同市ではそうした全体的な研修のほかにも、近隣の園と小学校が対話をする機会を設けています。園長・校長会、保育者による授業参観、合同研修、公開保育参観、担当者会などさまざまな場がありますが、その原点には、互いを尊重し合う気持ちを育てたいという思いがあります。

「顔を合わせて語り合う中で、互いの立場での頑張りや苦勞を理解し、共感し合えるようになりませう。連携先に知っている先生が1人でもいれば、『園、あるいは小学校にもっと頑張ってもらいたい』といった不満は生じず、ともに解決しようという姿勢になると思います」(田村課長)

園でも小学校でも 夢中になる中で子どもは学ぶ

カリキュラムを始めとしたさまざまな枠組みが整い、子どもの育ちに好影響が表れている園や小学校も見られます。

「ある小学校の先生が、『高学年の子どもがいろいろなことに興味をもって取り組むようになったのは、幼保小連携を継続してきた成果だと思う』と話してくれました。園も小学校も業務が忙しく、

幼保小連携の優先順位が下がる場合があることも理解していますが、接続期に適切な支援をすると、子どもの育ちは大きく変わりますし、結果的に園や小学校の運営がスムーズになることは、繰り返し伝えていきたいと思います」(田村課長)

園側からは、「幼児期に育まれた力が小学校教育にどのようにつながっていくかをイメージできた」「子どもたちの体験の幅を広げたり、遊びの質を高めたりする環境構成を、より工夫するようになった」といった声が聞かれます。

今後は、人口規模が大きい都市ならではの浸透度の濃淡を埋めるべく、カリキュラム作成や研修制度、事例発信の方法など、それぞれの取り組みの「質」を高めていくことをめざしています。例えば、各地区で、幼保小の先生が「10の姿」をもとに子どもの育ちを共有する研修を行っているか、アプローチカリキュラムやスタートカリキュラムを話し合って一緒に作成しているかなどを調査し、共有・協働の機会を増やす支援につなげることを考えています。園の先生と小学校の先生が互いの環境へ行っって先生をする、あるいは子どもとして保育や授業を体験するという交流のアイデアもあります。また、よい事例に共通するエッセンスを一般化して、動画なども用いながらより多くの先生方の目に触れる方法を模索したいとも考えています。その視線の先には、一人ひとりの子どもの未来があります。

「園でも小学校でも、自分のやりたいことに夢中で取り組む中に学びがあることに変わりはなく、そうした体験の積み重ねで大切な力が育っていくと思います。保育や教育でそれを実践するには、私たち大人が、子どもがおもしろがる姿を受容・尊重し、ともにおもしろがるようになることが必要ではないでしょうか。そのような大人として子どもにかかわり、その体験が将来どう生かされるのかという視点を忘れずに、支援のあり方を考え続けていきます」(田村課長)

横浜市

◎人口: 約378万人 ◎面積: 437.4 km²

◎園・小学校の数: 市立小学校 338校、幼稚園 223園、認定こども園 64園、保育所(横浜保育室を含む)約1,500園(2022年4月現在)

小学校の取り組み事例

横浜市立恩田小学校（神奈川県）

幼児期の体験をベースに 一人ひとりが自己を発揮し 「自ら育つ」学校へ

取り組みの ポイント

- 園の環境にならい、一人ひとりが安心して自己を発揮できる場をつくる。
- 指示やルールに漫然と従うのではなく、自分で考えて問題を解決する力を育む。
- 教科学習は、子どもの興味や関心を出発点として展開する。
- 幼保小の先生の交流や情報交換を活発化し、ともに子どもにかかわる関係を強化する。

“ 「子どもを育てる学校」から、「子どもが育つ学校」へ ”

入学期は園生活に近い活動で スムーズな接続を図る

登校してランドセルを置いた後、友だちと誘い合って、好きな遊びやお絵かき、工作など、約30分間にわたり、興味のあることに取り組む——。横浜市立恩田小学校が1年生の4、5月に設定している「あそびタイム」では、子どもたちは、安心できる環境や信頼できる先生に囲まれていた園生活を思い出すかのように、教室でも自由に過ごしながらか「自分らしさ」を発揮していきます。そして、その様子を見守る先生は、一人ひとりの特性を見取り、どう支えていくかを考えます。

こうしたサポートの原点には、子どもを主語とした学校教育をめざし、「子どもを育てる学校」から「子どもが育つ学校」に変わっていかうとする思いがあると、校長の寶來生志子先生は話します。

「幼児教育では、子どもは自ら学ぶ意欲と力をもつ有能な学び手と理解されています。小学校でも

\\ お話してくださった先生 //

横浜市立恩田小学校

校長

ほうらいまきしこ
寶來生志子先生



同じ子ども観を共有して、幼児教育と連動しながら、学びの基礎をつくり上げていく必要があると考えています」

同校では、横浜市が策定した「横浜版接続期カリキュラム」に基づき、スタートカリキュラムを編成しています。スタートカリキュラムの柱となるのは、「なかよタイム」「わくわくタイム」「ぐんぐんタイム」の3つの学びの時間帯（P.7 図2 参照）で、その内容は各校が教育目標や子どもの実態に合わせて設定できるようになっています。同校では、子どもがスムーズに小学校の生活や学びに溶け込めるように検討を重ね、見通しをもった週案を作成しました（図1）。学校独自の設定であ

図1 恩田小学校のスタートカリキュラム週案

入学して2週目は、「なかよしタイム」を中心として、友だちと仲よくなったり、身近な疑問を追いかけたりする活動が中心です。幼児期の学びと児童期の学びを行きつ戻りつしながら、両者をつなぐような構成になっています。

1年1組	月曜日 4月11日	火曜日 4月12日	水曜日 4月13日	木曜日 4月14日	金曜日 4月15日
行事予定	午前授業 集団登校（全学年）	午前授業 朝会（全学年）	給食開始（全学年）	発育測定（1年）	・避難訓練（火災） ・委員会（全学年）
朝の活動	あそびタイム （9：00まで）	あそびタイム （9：00まで）	あそびタイム （9：00まで）	あそびタイム （9：00まで）	あそびタイム （9：00まで）
1	恩田 なかよしタイム ・あいさつ ・元気かな？（〇〇さん） ・歌っておどろろ ・読み聞かせ	恩田 なかよしタイム ・あいさつ ・元気かな？（〇〇さん） ・歌っておどろろ ・読み聞かせ	恩田 なかよしタイム ・あいさつ ・元気かな？（〇〇さん） ・歌っておどろろ ・読み聞かせ	恩田 なかよしタイム ・あいさつ ・元気かな？（〇〇さん） ・歌っておどろろ ・読み聞かせ	恩田 なかよしタイム ・あいさつ ・元気かな？（〇〇さん） ・歌っておどろろ ・読み聞かせ
2	国語 なかよしタイム ・「自己紹介ゲーム」をしよう（好きなくだもの） ・動画を見る ・絵をかく ・自己紹介をし合う	国語 なかよしタイム ・「自己紹介ゲーム」をしよう（好きな動物） ・絵をかく ・自己紹介をし合う	国語 なかよしタイム ・「自己紹介ゲーム」をしよう（好きな形） ・絵をかく ・自己紹介をし合う ・「右左であそぼう」 ・動画を見る	恩田 わくわくタイム 「学校のはてな？を解決しよう」 ・お勉強はいつするの？ ・お道具箱どうするの？ ・発育測定ってなあに？ ・着替え	学活 わくわくタイム ・避難訓練ってなあに？ ・どうやって避難すればいいのかな？ 【避難訓練】
3	恩田 わくわくタイム 「学校のはてな？を解決しよう」 ・荷物はどうしよう？（お道具箱・体操着・探検バッグ）	恩田 ぐんぐんタイム 「着替えてみよう」 ・どうやって着替えたらいのかな？ ・着替え終わったら校歌を歌おう ・校庭であそぼう	恩田 わくわくタイム 「学校のはてな？を解決しよう」 ・荷物はどうしよう？（給食セット、防災頭巾）	行事 【発育測定】 ・発育測定大作戦を成功させよう！	生活 学校探検 ・中休みに行った場所を共有する ・恩田小学校には何があるのだろう？ ・どうしたら楽しく探検できるかな？ ・見つけた場所を共有する
4	学活 わくわくタイム 「なかよく帰ろう」 ・配布物を配る ・帰りの支度 ・方面確認	学活 わくわくタイム 「なかよく帰ろう」 ・配布物を配る ・帰りの支度 ・方面確認	学活 わくわくタイム 【今日から給食】 「給食のはてな？を見つけて解決しよう」 ・給食当番 ・いよいよ給食室を外から探検する ・給食の準備をしよう	国語 「あいえおうさま」 ・文字練習と言葉集め ・ひらがな屋のお店 ・「どうぞ」「ありがとう」 【校長先生】	国語 「はじめてのなまえ」 ・自分の名前を書く ・周りの色を塗る

「恩田」は、教科ではない授業時数以外の教育活動です。

各内容は、子どもの目線に立ち、子どもの疑問、興味・関心、思いや願いに基づいています。

子どもの集中力が続くよう、小刻みな時間設定も可能です。

※恩田小学校のカリキュラムを、一部編集して掲載。

る「あそびタイム」で気持ちを高めた後は、歌やダンス、読み聞かせなど、なじみのある活動で構成した「なかよしタイム」に移ります。入学直後は「なかよしタイム」が中心ですが、子どもが学校生活に慣れてくると、次第に生活科を中心とした学習活動の「わくわくタイム」、教科などを中心とした学習活動の「ぐんぐんタイム」の割合を増やしていきます。

必要感のある疑問を引き出して 自ら学び続ける力を育てる

多くの小学校が入学後に行う「学校探検」では、あらかじめ先生が設定したルートに沿って教室や施設を巡る活動が一般的です。また、給食について学ぶ活動では、給食当番のルールなどを教えるケースが多く見られます。それに対して同校の「わ

くわくタイム」では、先生が子どもの発想や考えを引き出しながら、子ども自身が必要感のある疑問をもち、自らの活動をつくり上げていきます。

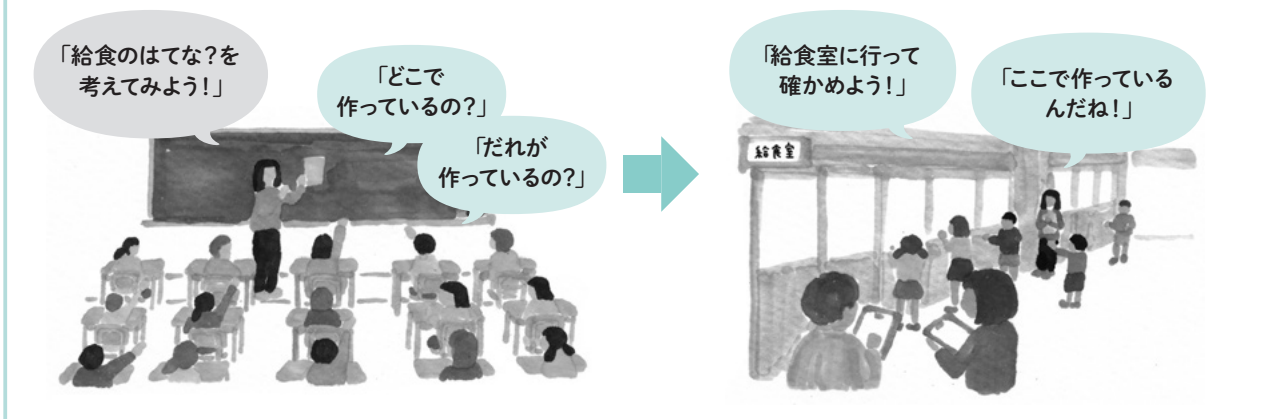
「園では、子どもたちが遊びに取り組む中で、多くの学びが生まれます。ところが、小学校に入ると先生の指示に静かに従うことが求められるため、自分から考えたり動いたりしない『考えないスイッチ』が入ってしまう子どもが少なくありませんでした。本校では、先生が子どもに対して『みんなの考えを聞かせて』『何をしたいのかを一緒に考えよう』と質問をぶつけることで、子どもにそれまで育まれてきた資質・能力を引き出しています」（寶來先生）

「給食のはてな？を見つけて解決しよう」という活動でも、給食室まで決められたルートを並んで歩かせたりせず、「給食はどこで作っている？」「なおいのする方に行ってみよう！」といった子ども

図2 恩田小学校のスタートカリキュラム①

給食のはてな？を見つけて解決しよう

最初に子どもから集めた、給食に関する疑問を解決していくという流れで、必要感のある疑問を自らの考えに沿って探究していきます。



の意見をもとに展開しました。遠回りをして向かう子どもがいても、先生は子どもが思いを存分に満たせるよう、口を出さずに見守りました(図2)。

初めて体育館へ行く活動にも、個々の考えをもとに協働して解決することを促しました。体育館のドアが施錠されていたため、先生が「どうしたらいいと思う？」と声をかけました。子どもたちは職員室に向かい、鍵置き場から1つを選んで体育館に戻りました。しかし、別の鍵だったためにドアは開かず、再び職員室を訪れることに。正しい鍵を選んでドアが開くと、みんなの力を合わせて体育館に入れた喜びから、子どもたちは歓声を上げました(図3)。その後、子どもから「漢字がわからなくて間違えたので、ひらがなで書いてほしい」という要望があり、すべての鍵のキーホルダーにふりがなをつけたそうです。

「最初から先生が鍵を開けていたら、協力して問

題を解決するプロセスは体験できませんでした。みんなで相談しながら体育館に入れたという体験は一人ひとりの自信になり、ほかの場面でも友だちの考えを大切に聴いたり、友だちに学んだりする姿勢につながるはずです」(寶來先生)

算数や国語などの学習でも、生活科の内容や興味・関心のあることに結びつけて、学びを深めていきます。例えば、毎日の読み聞かせや、学校探検で図書室を見学して本に興味をもったことをきっかけに文字の学習に入ったり、算数の数の概念を学ぶ学習では、「あそびタイム」で子どもが慣れ親しんでいるおはじきを使ったりします。時間割も、子どもの集中力が続くように10分や15分といった小刻みな時間を設定することもあります。

「教科学習でも、先生が『これを読んでどう思った?』などと働きかけて、子どもの問いを引き出しながら授業を進めていきます」(寶來先生)

“ 園では、幼児期にしかできない体験を大切にしてほしい ”

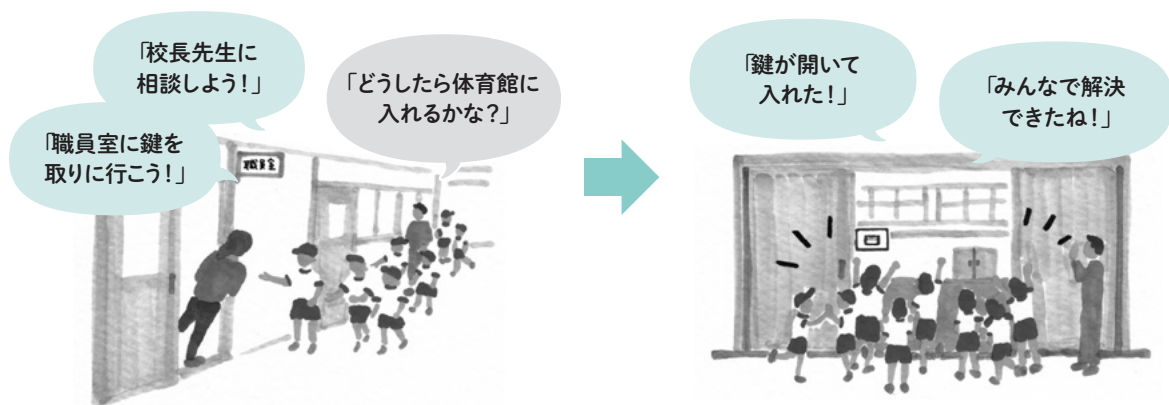
「10の姿」を手がかりとして 全教職員で1年生の育ちを共有

入学式前には全教職員が参加して、スタートカリキュラムに関する研修会を実施し、スタートカ

リキュラムのねらいや内容、1年生を支えていく方針を学校全体で共有します。子どもの育ちについて目線合わせをする際の手がかりとしているのが、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(以下、「10の姿」)です。「10の姿」をベースに小学校で

図3 恩田小学校のスタートカリキュラム②

体育館のドアの鍵が閉まっていたら……



体育館のドアの鍵が閉まっていたとき、先生が対処するのではなく、子どもたち自身が解決方法を考えることで、友だちと協力しながら行動する力を育てていきます。

育てたい資質・能力につなげています。また、教職員だけでなく上級生にも、1年生を子ども扱いしすぎないようお願いをしています。

幼保小の連続した学びを充実させていくために、地域の園との交流や情報交換も大切にしています。2022年5月に実施したスタートカリキュラムの授業研究会では、地域の園から保育者を招いて小学校での実践を共有しました。保育者が時間を確保しづらい場合は、午睡中などの空いた時間だけの参加とし、その後、感想を送ってもらいました。

「コロナ禍前、前任校では地域の園に公開保育を実施してもらい、複数の小学校の先生たちと参観して、子どもの姿について『10の姿』をもとに保育者と語り合う研修を実施していました。小学校の先生が年長の子どもたちの活動する姿を見て、『年長さんでも話し合えるのですね』と幼児期の子どもに対する見方を改めたり、子どもの興味を引くための環境構成を学べたりなど、互いに多くの発見がある有意義な研修でした」（寶來先生）

小学校には、「授業中は椅子に座る」「廊下は1列で歩く」など、集団生活を送る上でのさまざま

なルールがあります。そうしたルールを子どもたちに浸透させる際にも、一方的な押しつけにならないような工夫をしています。例えば、入学式後の保護者への説明の際には、子どもに折り紙を渡し、「これで遊んでいてね」と伝えると、子どもたちは集中して静かに待っています。そのように、子どもが自然に集団生活に溶け込めるような環境やルールのあり方を、学校側がこれまで以上に考えていく必要があると、寶來先生は話します。

「園の先生方が学校生活のルールや学習活動などを念頭に置き、入学前の準備について質問されることがよくあります。それに対する私からの答えは、『特別な準備は必要ない』です。時間の潤沢な幼児期に、好奇心をもち、好きなことに夢中になり、自分で何かを決めて取り組む。そうした体験をしてきた子どもたちが集まると、それぞれのよさを分かち合っただけで素晴らしい学びが生まれます。これからは園では、小学校の前倒しは考えずに幼児期にしかできない体験を支えることに集中し、わくわく感を体いっぱい詰めた子どもたちを、安心して小学校に送り出してほしいと思います」

横浜市立
恩田小学校

学校教育目標は、「自ら学び、ともに豊かな生活を創り出す子どもの育成」。2022年度は、教職員の受容的なかわりと子ども自らが学びたい環境づくりに重点を置く。

- ◎ 校長：寶來生志子先生
- ◎ 所在地：神奈川県横浜市青葉区桂台2-36
- ◎ 児童数：462人(2022年10月現在)